

クレアのジプシー詩

鈴木蓮一

Clare's Gipsy Poems

Renichi SUZUKI

(Received September 2, 2002)

(1)

Raymond Williams は Merryn Williams と編集した *John Clare: Selected Poetry and Prose* の巻末に付した 'Critical commentary' において、クレアの 'The Gipsy Camp' (1840-41 年作) とワーズワスの 'Gipsies' (1807 年作) を取り上げた短い論評の後で次のように述べている。

The gypsies were particularly important in his (Clare's) scheme of things because they represented people living outside society and obeying only the laws of their own nature. They are anarchic but non-violent, living as the birds do by picking up what they can get. Clare does not sentimentalize them, but he does feel that they do less harm than many respectable citizens.¹⁾

クレアはジプシーをテーマとしていくつかの比較的短い詩を書いている。それらの詩においては、R. Williams がいうように、ジプシーの存在は見過ごすには余りに大きな意味をもっており、詩人の重要な政治的・社会的視野を示している。14・5歳の時に書かれた最も初期の詩である 'The Gipsies Evening Blaze' は個人的な体験をもとに少年時代のジプシーの生活への憧憬を表現したものである。また 'The Gipseys Camp' (1819-20 年作) は、ジプシーの女占い師についてのやはり個人的な体験をもとにした回想詩となっている。'Recollections After a Ramble' (1819-20 年作) では詩人がジプシーの音楽やダンス、とりわけ若い女性の歌を大変愛好していたことを叙述している。初期の詩に見られるジプシーの生活像はリアルに描かれている。だが 'The Village Minstrel' (1821 年) ではジプシーを擁護する詩人の分身である Lubin は「あなたがたジプシーの人々は情景を美しいものにした」(your groups did beautify the scene)²⁾ と考えた。'The Shepherd's Calendar' (1827 年) では、ワーズワスが「馬上から」(from horseback)³⁾ ジプシーたちを見て、彼らの怠惰を嘆いたのと同様に、クレアは彼らを表面的にしか見ない傾向があった。換言すれば、クレアのジプシー観には、彼らをピクチャレスクなものとして描写する傾向があった。この傾向は、この詩のジプシーについての叙述における次のような結論部分で端的に現れている。

Such the abodes neath hedge or spreading oak
& but discoverd by its curling smoak
Puffing & peeping up as wills the breeze

Between the branches of the colored trees
 Such are the pictures that October yields
 To please the poet as he walks the fields⁴⁾

クレアがジプシーをこのように審美的に、言い換えれば「自然」と調和して、自然風景に美を与える存在として見ていたこととは別に、ジプシーを‘sentimentalize’しないで描出し、同時に詩人自身の彼らへの共感を暗示していることが初期のジプシー詩の特徴であると言える。この特徴は、ジプシーの生活を描写したクレアの詩の中で最も優れたものであると評価されている後期のソネット、‘The Gipsy Camp’ (1840-41年作)においても明瞭に読み取れる。この詩では、ジプシーと犬が共に貧困のうちに生きていく様子をリアルに描写している。詩人には、控えめで、気取らないジプシーたちの姿が彼らの生活している場所と見事に調和していて、美しいものに思われた。彼らの生活が「その場所を美しくしているもの」(a picture to the place)であると叙述していることは、彼らを迫害し、追放する定住者とその文明化した社会への政治的批判として受けとれる。彼らが盗みをしたり、嘘をついたりしても、それは彼らが「法によって護られていない一群の人々」(unprotected race)であるがゆえのことである。J. McKusickのいう「たじろがぬ率直さ」(unflinching candour)⁵⁾でもって描かれたジプシーと犬の姿は「追放者の中の追放者」(an outcast among outcasts)⁶⁾というイメージがつかまとう。この詩の描写においては、詩人とジプシーの間には何ら接触はない。だが彼らのイメージには、「精神病院というまったく周辺的世界において、人間の親切心の温かさすべてから除外されたクレア自身の生活との共感的同一化」(a sympathetic identification with Clare’s own existence, excluded from the warmth of all human kindness in the utterly marginal world of the asylum)⁷⁾がみられる。詩人はジプシーの生活を「たんに興味深いエキゾチズム」としてではなく、田舎の困窮生活を強いられがちな「馴染みのある仲間」として見ている。精神病院で過ごすクレアはすでに自己のアイデンティティを喪失する危機にあり、自らを「放浪者」(wanderer)と感じていた。追放者として放浪するジプシーについての「もの静かな、盗みをはたらく、法によって護られていない一群の人々」(A quiet, pilfering, unprotected race)という表現は、自由や平等に関わる人間の権利を奪われつつあった下層労働者とそのひとりとしての詩人、そしてジプシーという三者の「同盟」を読者に意識させる。この詩のもつリアリズムはジプシーの生活状態のエッセンスを客観的にかつ精確に捉えている。それは同時に詩人の感情もまた暗示している。このようなリアリズムはクレアの詩全体の著しい特質であり、特長でもある。だがジプシーを取り扱った詩においては別の大きな特質がある。その特質は、他のロマン派詩人たちの作品に共通して見られるアイデアリズム、即ち理想主義である。クレアの中期の詩である‘The Gipseys Song’ (1825年)は、一見して詩人が体験し、熟知していたジプシーの生活・習慣・気質をうたっているようであるが、この詩の真の目的は詩人自身の感情を表現することであった。それゆえこの抒情詩は、ジプシーの存在を描写することによってイギリス社会における人間存在とそれを取り巻く自然環境のもつ諸問題を提出していると考えられる。本稿ではこの詩の各連を読みながら、これらの諸問題についてのクレアの考察と彼の理想主義の内容を解明していきたい。

(2)

‘The Gipseys Song’についてクレアは、出版者の Hessey 宛ての手紙（1825年12月8日付け）の中で「私はあなたがたが『ジプシーの歌』と『流行』を気に入ってくれたのは嬉しく思います」（I am glad you liked the Gipsy Song & the Popularity）⁸⁾ と言っている。‘you’とは Hessey とパトロンの一人であった Mrs. Emerson である。クレアのラディカルな社会批判の表現を好まなかった二人の意に適ったこの詩は1825年の11月に73-76行と81-84行が削除され、匿名で *European Magazine* に掲載された。このことはこの詩の理想主義的な詩風が当時の詩の読者たちの好みと流行に合致したことを意味している。

The gipseys life is a merry life
 & happy boys we be
 We pay no rent nor tax to none
 But live untythd & free
 None cares for us for none care we
 & were* we list we roam
 & merry boys we gipseys be
 Tho the wild woods are our home⁹⁾ *where

1 連で詩人はジプシーの生活が楽しいものであるとあって、彼らの生活についてのロマンティックなイメージを読者に与える。彼らは借家料や税金を誰にも払わなくてよい。また自分たち以外の人たちを気にすることや、自分たち以外の誰からも干渉されることもなく好きな場所を自由に放浪することができる。‘The gipseys life is a merry life’ と言っているが、ジプシーについてのロマンティックなイメージは19世紀のヨーロッパの文学や音楽を通して得られるものであるというジュール・ブロックも彼らの生活について、「家族や家財道具いっさいを積みこんだ家馬車をつらねて、気の向くままにヨーロッパの田舎を流浪してあるき、よい場所をみつけてテントを張り、ブナの木かげでたき火をかこみ、音楽と踊りに夜を徹する。自分の文盲を気にするどころか、文明の制約をまったく離れた自由奔放な生活を心ゆくまで楽しんでいる」¹⁰⁾ と述べている。詩人がこの詩を語るのに一人称単数の I ではなくその複数 we を用いることによって、この詩は詩人個人の思想と感情を表現するというより、むしろジプシーという追放者集団の生活を語ることを通じて彼らの思想と感情を表現したものになっている。その表現は社会において疎外され、虐待されている下層労働者階級の思想と感情も同時に暗示しているように思われる。語り手がジプシーの仲間のひとりであることは、詩人とジプシーとの親密感のみならず、詩人の「同盟者」であると考えられるジプシーとの階級的連帯感も表している。この親密感は、クレアとジプシーとの長年にわたる交際から生じたものであることはいうまでもない。クレアがジプシーと親密な交際をしていたことを証明する事実についての言及は彼の散文の中に見出されるが、ここでは ‘Autobiographical Fragments’ からその二例をあげる。

they (Clare’s old companions and fellow clowns) fancied I kept aloof from company for some sort of study others believed me crazd and some put more criminal interpretations to my rambles and

said I was night walking associate with the gipseys robbing the woods of the hares and pheasants because I was often in their company and I must confess I found them far more honest than* their callumniators whom I knew to be of that description¹¹⁾ *than

As soon as I go here the Smiths gang of gipseys came and encampd near the town and as I began to be a desent scraper we had a desent round of merriment for a fortnight some times going to dance or drink at the camp and other times at the publick house¹²⁾

クレアはジプシーのスミス家の人たちと一緒に暮らしたいと切望していたことがあるが、結局彼らのいい加減な調理の仕方が気に入らなかったこととテント生活における冬の寒さが怖かったことが理由で、その希望をあきらめた。彼らは、村や町の定住者が住むような家をもっていないが、陽気な男たちであるという。「森がわれわれの家である」(the wild woods are our home) という表現では、ジプシーが社会の追放者であると同時に法を無視する、いわゆる無法者として野生の動物たちと同様に、「自然」と融合・調和した生活を送っていることを強調している。またこの表現には C. Lamont が指摘するように、ロビン・フッドのような民間伝承の英雄たちを反響させながら「社会」というものを馬鹿にして、「独立」というものをよるこんでいるようなところがある。¹³⁾ 野生の動物と同じように自然の中を放浪するジプシーの生活を「楽しい生活」だと詠嘆する詩人の脳裏に去来するものは、税と借家料に苦しむ田舎の貧しい労働者階級の人々である。2連は次のようである。

& come what will brings no dismay
 Were with few cares perplex
 For if todays a swaily day
 We hope for luck the next
 & thus we sing & kiss our mates
 While our chorus still shall be
 Bad luck to tyrant majistrates
 & the gipseys dwelling free

2連においても1連でのジプシーの陽気さの強調が繰り返される。‘Were’は‘We are’のことであり、‘Were with few cares perplex’は「われわれは苦労や心配で途方に暮れることはほとんどない」という意味であるが、‘cares’は1連の‘rent’や‘tax’を支払うことを含めて定住者が負わねばならない一切の義務を指している。ジプシーが陽気に生活できるのは森に住む動物たちのように、経済的競争社会のしくみの枠外、あるいは周縁で生活していたため土地や財産を所有することへの執着心が弱かったからである。「今日薄暗い日であるならば／翌日の幸運を望む」という詩句は彼らの気質を象徴的に表している。彼らの合唱が続く限り、ジプシーの男たちは恋人や妻たちと仲むつまじく暮らしていく。ただひとつ、ジプシーにとって厄介な人間がいる。それは「圧制者である治安判事たち」(tyrant majistrates)である。「治安判事たちに悪運あれ／そうすればジプシーの住む場所は自由となる。」‘the gipseys dwelling free’とはどういう意味であろうか。1連の‘(We) live untythd & free’の場合、‘free’は「ただで、無料で」を意味するが、‘the gipseys dwelling free’の場合はその意味の外に、彼らの住む場所を選択する自由も意味すると考えられる。だが

ジプシーたちが移動し、テントを張る場所は次第にせばめられ、住む場所を選択する自由は失われつつあるのが現実であった。彼らが住む場所は所有者のいない森、共有地、荒地などであったけれども、「囲い込み」によってそれらの土地は集約農業のための農地に変貌し、貴族や中産階級の私有地に変化していった。その私有地の所有者たちの所有権は法によって護られていたので、ジプシーは私有地では住むことができなかった。ジプシーや貧しい労働者が私有地で獲物を狩猟し、作物や薪などを採取することは禁止されていたし、無許可で私有地に侵入することさえ流刑や死刑に処せられる重罪であった。こういう事情があったので、「いつもの場所」(customary sites)¹⁴⁾に野営することを諦めないジプシーたちはとくに治安判事によって私有地への「不法侵入」(trespass)と「多くのちょっとした盗み」(many a petty theft)¹⁵⁾あるいは「無邪気なこそ泥」(イノセント・ピルファリング)¹⁶⁾の嫌疑をかけられたのである。これに関連した興味深い一節が‘Autobiographical Fragments’に見られる。

their (gipsy's) black arts was nothing more of witchcraft than* the knowledge of village gossips and petty deceptions playd off on believing ignorance but every thing that is bad is thrown upon the gipseys their name has grown into an ill omen and when any of the tribe are guilty of an petty theft the odium is thrown upon the whole tribe¹⁷⁾ *than

悪いことはすべてジプシーたちのせいとされる。彼らの名前は不吉な前兆となっており、彼らの中の誰かが小さな盗みを犯したときでも、非難は彼ら全員に向けられるのである。この一節にはジプシーを擁護したいクレアの気持ちがよく現れている。治安判事は、馬を盗んだかどで有罪とされた二人のジプシーに言い渡した判決文の中で次のように述べている。

This atrocious tribe of wandering vagabonds ought to be made outlaws in every civilized kingdom and exterminated from the face of the earth¹⁸⁾

何とこの冷酷非情な治安判事は牧師なのである。この判決文の内容を読むと、ナチスによって虐殺された無数のユダヤ人とジプシーたちが思い出される。またジプシーにかぎらず、社会からの貧しい追放者についてはクレアの次のような記述がある。

the poor outcast who robs for hunger [&] is sent to botany bay for stealing an hankerchief from a pocket & is described by the papers as the ‘execrable villain [who] was overtaken by justice in the morning of this infamy’ but which is the most infamous he who suffers the law or he escapes it¹⁹⁾

追放者は飢えのために食べ物を、またハンカチ一枚を盗んだ罪でオーストラリアの犯罪人収容所に送られ、新聞には「極悪人」(execrable villain)と書かれる。クレアは、治安判事からは残忍な処罰を受け、苛酷な法に苦しむ貧しい追放者よりも、詐欺をはたらくけれど、治安判事からは大目に見られ、法の網を逃れる商人の方こそ最も破廉恥であると述べている。この一節においても、ジプシーなどの社会からの追放者へのクレアの温かい擁護と共感が確かに読み取れる。

ジプシーの貧困は‘The Village Minstrel’(1821年)における彼らの食べ物についての叙述によく現れている。この詩の主人公であるルービンはジプシーたちの「意味のわからないおしゃべり」や「風変わりな生活」が大好きであったから、彼らと共に時を過ごした。

While on two forked sticks wi cordage tyd
 Their pot oer pilferd fuel boils away
 Wi food of sheep that of red water dyd
 Or any nauceous thing their frowning fates provide (1152-55)

ふたまたになった棒に縄で結わえられ吊り下げられた鍋が、盗んできた薪の炎の上でグツグツと煮えている。その鍋の中には「血尿病」にかかって死んだ羊の肉、あるいは「胸が悪くなるような食べ物」が入っている。彼らは動物の「死体」(dead meat)を食べると噂されるが、それは貧困ゆえにやむなくすることであると詩人は弁護する。²⁰⁾そして、彼らの貧困は「彼らの苛酷な運命」(their frowning fates)によってもたらされたものであると詩人は提示している。ジプシーたちの貧困の原因が定住者たち、なかでも土地を所有する支配階級による彼らへの疎外や迫害にあるということを詩人は知っていたけれども、読者の好みを顧慮した結果、その原因を明示しないで、「運命」をその原因として提示することが詩人としての命脈を保つためには得策と考えたのであろう。ジプシーの不法侵入や生きるための必需品の窃盗が彼らの困窮と結びつけられているため、読者はジプシーをただ単に「興味深い風変わりなものとして」(as interesting exotics)ではなく、「ふつうよくある欲求や不測の出来事によって衝き動かされ、そしてとくに田舎の貧苦を受けやすい同じ境遇の人間として」(as fellow mortals driven by familiar needs and contingencies, and particularly vulnerable to the hardship of rural life)²¹⁾、新しい眼で見ることが可能となっている。次の連を見ていこう。

To mend old pans & bottom chairs
 Around the towns we tramp
 When a day or two our purse repairs
 & plenty fills our camp
 & our songs we sing & our fiddles sound
 Their cat gut harmony
 While eccho fills the woods around
 With gipsey liberty

古い鍋を修繕したり、椅子の座部を付けたりして生活費を稼ぐため、ジプシーは村々を旅して回る。稼いだお金で懐具合がよくなると、買い込んだ飲食物でテントの中はいっぱいになる。そしてバイオリンの演奏に合わせて歌い、辺りの森は「ジプシーの自由」が響きわたる。1, 2連における‘free’と同様、‘liberty’もジプシーの生活を特徴づけるキーワードである。

The green grass is our softest bed
 The sun our clock we call
 The nightly sky hangs over head
 Our curtains house & all
 Tho housless while the wild winds blow
 Our joys are uncontrould
 We bare foot dance thro winters snow

When others dye with cold

4連は住まいとしてのテントとその生活を述べている。テントがジプシーの家である。緑の草むらがとても柔らかいベッドであり、太陽の動きを見て時刻を知る。夜になると空が頭上に垂れ、あとはカーテンとテントが在るばかりである。激しい突風が吹くときはテントを張ることができないけれど、そのためにジプシーの陽気さが陰ることはない。「われわれの喜びは抑制されないのだ」(Our joys are uncontrouled) という一行では、人間としての尊厳に満ちたジプシーの存在の本質である「喜び」が強調される。「他のものたちが寒さで息絶えるときでさえ／われわれは冬の雪のなかをはだして踊る」という表現を考えてみよう。雪が降る寒い日には自然界に住む動物たちは、食べ物の乏しさのため飢え死にし、植物も枯れ凋む。人間界においても貧窮する労働者階級や放浪者は、家の暖炉の欠乏と飢えのため死に瀕したであろう。ジプシー自身も悲惨な生活状態を社会の最下層の人々と共有する者であるにもかかわらず、何百年もの長い間「自然」の中で生き延びてきたのである。彼らの伝統に育まれ、生命力に溢れたたくましさでもって、ジプシーたちはいわば「雪の中をはだして踊る」のである。詩人はこの表現において、生活の困難と闘いながら「自然」との一体感の中に「喜び」を見出し、たくましく生きていくジプシーの姿を描こうとしている。ジプシーの生活におけるこのような「自然」との調和こそ詩人が最も尊重したものである。

追放者としてのジプシーの貧困状態への言及は、'The Village Minstrel' において「共有地から共有地へと移動用テントを運ぶ／ぼろを着た哀れなこの国の追放者たちよ」(& you ye poor ragd out casts of the land / That hug your shifting camps from green to green 1138-39) や「運命がもたらすひどい貧困生活を送るよう定められた哀れな放浪者たちよ」(Poor wandering souls to fates hard want decreed 1143) という呼びかけの中にも現れており、こうした言及は明らかにジプシーへの詩人の共感を強調するものである。'fate' という語を用いているのは何故なのか。またその語が意味することは何なのか。それは、ジプシーを「危険な無法者たち」(dangerous outlaws) とみなした人々がジプシーたちの「自由」や人間としての尊厳を認めず、それまで慣習的に是認され、保証されてきた、生きるための人間の諸権利を「囲い込み」という農業改革を通じて彼らから奪い始めたことを意味する。つまり「運命がもたらすひどい貧困生活」とは支配階級が強要する貧困生活と彼らが行うジプシーへの虐待のことを暗示する婉曲的表現である。

Doubtless too oft such acts (as a petty theft) your ways bemean
& oft in wrong your foes 'gen you proceed
& brand a gipseys camp when others do the deed (1144-46)

「ちょっとした盗み」のような行為はよくジプシーの生活態度を貶めるし、しばしばジプシーたちを危険視する者たちは誤って彼らを告訴する。ジプシー以外の者が盗んでいてもジプシーがやったのだと判断し、彼らに濡れ衣を着せるのである。詩人はジプシーを擁護するために政治的社会的批判を行っているのである。John Lucas の言葉を借りれば次のようである。「ぼろを着た追放者たちをクレアが擁護していることは、社会的、政治的挑戦の行為として読まれなければならない。ぼろを着た者は、人間としての尊厳を否定された丸裸の者同然である」(Clare's championing of 'ragged outcasts' must be read as an act of social and political defiance. The ragged are akin to the naked in being denied their dignity.)²²⁾ また Lucas は、詩人が「立派な伝統と温かい情愛、

そしてまれにみる精神的威厳²³⁾をもったジプシーのために、無視されてきた人間的尊厳の回復を試みていると判断している。

ジプシー自身も、最下層の人々と同じ境遇を経験する者であるにもかかわらず、何世紀も長い間自然と共にたくましく生活してきたのであり、いわば生命力溢れて雪の中を「はだして踊る」のである。ここで詩人はジプシーの自然との一体感の中に「喜び」を見出しながら生きる姿を描こうとしている。詩人が尊重し、表現しようとしているものは「自然」と調和したジプシーの生活である。次の連では、より「自然」に近いジプシーの姿をその若い女性たちの中に見ている。

Our maidens they are fond & free
 & lasting are their charms
 Brown as the berry on the tree
 No suns their beauty harms
 Their beautys are no garden blooms
 That fade before they flower
 Unshelterd were* the tempest comes
 They smile in sun & shower *where

ジプシーの娘たちは優しく、自由である。この場合の‘free’は何を意味するのであろうか。利己心に捉らわれていない動物が何ものにも束縛されず、自然のままに生きている状態をいうのであろうか。定住者の女性たちが利害関係、損得勘定の生活を送るうちに生得の美しさ、人間的な魅力を失いがちであるのに反し、ジプシーの女性たちの魅力は「自然」と調和して生きているがゆえに失われることはないという。「いかなる陽射しも彼女たちの美しさを損なうことはない」(No suns their beauty harms)とはジプシーの生活が「自然」との調和の状態にあることを端的に表現するものである。また「彼女たちの美しさは花を咲かせる前に／色褪せる庭の花ではない」(Their beautys are no garden blooms / That fade before they flower)における「花を咲かせる前に色褪せる庭の花」とは人間によって矯正され、秩序だてられた、整然とした自然を象徴している。詩人が尊重しているのは「自然の状態」、すなわち *wildness* であり、自由にのびのびと生きている生き物たち、すなわち *wildlife* である。その生き物たちの生きている様態こそが詩人にとって「美」であり、真に価値あるものである。こういう意味で、ジプシーの娘たちは「自然」の生き物たちと同様に美しい存在であった。

「大荒れの日でも被い守られることなく／ジプシーの娘たちは陽射しのなか雨のなか笑顔をみせる」(Unshelterd were the tempest comes / They smile in sun & shower)。詩人にとってジプシーはまさしく自然人と思われたのである。自然人としてのジプシーへの礼賛はさらに続く。

& they are *wild* as the wood land hare
 That feeds on the evening lea
 & what care we for ladys fair
 Since ours are fond & free
 False hearts hide in a lily skin
 But ours are coarse & fond
 No parsons fetters link us in

Our hearts a stronger bond (my emphasis)

ジプシーの娘たちは森に住むウサギのように wild であるというが、この場合の wild はどう解釈すればよいであろうか。次連一行目の 'the wild woods are our house & home' の場合のように、この語はただ単に「野生の、人馴れしていない」(uncivilized) という意味をもつに止まらない。それは、ジプシーたちが産業革命の基盤ができあがった19世紀初頭の英国社会における物質主義・拝金主義を生み出した「利己心」(self interest) を過度に追求する風潮に染まることなく、独自の文化を護り、維持しながら生活していることを物語っているのである。当時の英国は産業資本主義が発展し、上・中流階級から成る資本家たちがこぞって私利私欲を追求した時代であった。都市のみならず田舎の社会においても人々は物質的繁栄に心を奪われていた。家財道具一切を積み込んだ家馬車で、家畜と共に流浪するのがジプシーの生活様式であったから、地域社会の定住者たちによる主要な経済活動に組み入れられることは少なかったであろう。彼らの職業といえば、「馬の売買」や「山師的な仕事」、「トランプ占い」というほどのものであった。定住者もつ文明生活から遊離した彼らの現実の生活は、むしろほとんど「迫害と差別の苦しい生活」であったといえる。しかしながら詩人はこの詩において、下層労働者たちから「自由」と基本的な「権利」が奪われ、行き過ぎた「利己心」が蔓延する定住者の文明生活に対立するものとしてジプシーの共同生活を理想化している。直接経験に基づくジプシーの性情について詩人は次のように考察している。これは定住者の文明生活に対する批判となっている。

I never met with a scholar amongst them (the gipsies) nor with one who had a reflecting mind they are susceptible of insult and even fall into sudden passions without a seeming cause their friendships are warm and their passions of short duration but their closest friendships are not to be relied on they are deceitful generally and have a strong propensity to lying yet they are not such dangerous characters as some in civilized life for one hardly ever hears of a Gipsy committing murder²⁴
(my emphasis)

クレアはジプシーの短所をありのままに述べている。クレアは学者や内省する心をもったジプシーには出会ったことがないという。彼らは侮辱されやすく、訳もなく急に激怒する。彼らの友情は熱いが、冷めやすく、大変親密な友情でさえ信頼できないし、嘘をつく癖がある。だが引用文中のイタリックスの部分は見落としてはならない意味もっている。都市であっても田舎であっても、文明生活を送る定住者はジプシーよりも危険な存在であるという。この文明化した英国社会を支配しているのは、「利己心」に駆られ、自己の金銭的・物質的欲望を満足させるため、社会の弱者をより貧窮させている権力者たちであるとクレアは感じていたのであろう。'committing murder' には、権力者たちが「利己心」の追求のために下層階級や「社会の追放者」を虐待し、彼らに悲惨な生活を強いていた当時の状況が暗示されている。

ジプシーの男性たちは、自分たちの若い女性たちが心優しく、自由であるから白人の裕福な女性を好きになることはない。白い肌の内側には不誠実な心が潜んでいるのに反し、ジプシーの娘たちは粗野で教養はないが、情愛深いという。また「どんな教区司祭の枷もわれわれを結びつけることはない／というのはわれわれの心が強い絆であるからだ」(No parsons fetters link us in / Our hearts a stronger bond) という表現は、教会での結婚式において牧師がもたらす夫婦の誓いとしての宗教的な枷がジプシーの男女を結びつけることはなく、ジプシー自身の連帯感が彼らを結

びつけているということを指している。またこの表現はジプシーが異教徒として英国国教会から排斥されていたことも暗示している。男性が女性を婚姻という形で所有することは、ちょうど土地や狩猟における獲物の所有と同様、自由な人間にとっての束縛であるとクレアは思っていたようだ。‘False hearts hide in a lily skin’は、不誠実な男女が損得勘定で結婚する「文明化した現実世界」(civilized life)への批判である。また‘our hearts (heart is) a stronger bond’は、このような政治的や宗教的な意味を表しているだけではなく、有機的な地域社会に住む人々の絆や連帯感といったものが、産業主義が国中に浸透するにつれて、希薄になっていった現実をも暗示している。経済活動における競争によって人間はますます利己心に捉らわれ、その心の結びつきは衰弱していった。産業化の波は田舎にも押し寄せ、そこでの人々の意識を「利益」(gain)一辺倒にしていった。浅黒い肌のジプシーの‘fond and free’と英国白人の‘false hearts’の対比からは、当時の人々の心から「共感」や「利他精神」が失われつつあった風潮を詩人は鋭く観察していたことが窺い知られる。

Tho the wild woods are our house & home
 Tis a home of liberty
 Free as the summer clouds we roam
 & merry boys we be
 We dance & sing the year along
 & loud our fiddles play
 & no day goes without a song
 With us all months are may

放浪の旅をするジプシーにとって森が「家」、すなわち「棲み家」である。‘house’といって、さらに同じ意味を表す‘home’という語をたたみかけることによって、詩人はこれらの語がもつ意味の重大さを強調していると考えられる。動物が森の中で生きているように、ジプシーも森の中に生きているのである。クレアの詩のキーワードの一つである‘home’は、‘The Nightingale’s Nest’において最も顕著であるのだが、エコロジーにおける「生息地」を暗示している。そのうえ彼らの「家」は‘a home of liberty’である。この家は、ジプシーが何者からも脅かされず、破壊されることも、またそこから追われることもない状態を表している。つまり、「森」はジプシーのこういう「自由」を保証するものである。さらに「夏の雲のようにわれわれは自由に放浪する」(free as the summer clouds we roam)というようにジプシーたちは思いのまま、好きなように移動できたのである。一年中バイオリンの演奏にあわせて歌い、踊って過ごす彼らの陽気さがこの連で強調される。彼らにとって「すべての月が五月のように楽しい」(all months are may)と1連の内容が繰り返される。

The crow that haunts the fallow grounds
 & round the common feeds
 The fox that tracks the wood land bounds
 & in the thicket breeds
 These are the neighbours were* we dwell
 & all the guests we see

That share & love the quiet well
Of gipsey liberty *where

休閒地によく舞い降りては共有地で餌をとっているカラス。森の中を駆け抜け、茂みの中で子を産み、育てるキツネ。こういった森の生き物が、それらの生き物と同様に共有地に住むジプシーにとって隣人であり、唯一の「客人」である。‘outcast’であるジプシーは森の生き物たちと共に生きている。こうした森の生き物たちにとって「休閒地」・「共有地」・「森」は、そこで生きていく場所、いわゆる生息地である。その場所はまたジプシーにとっても生息地なのである。これらの生き物も、ジプシーたちの「自由」が生まれ出る静かな泉、すなわち「共有地」や「森」を彼らと共に享受している。‘That(the guests) share and love the quiet well / Of gipsey liberty’ という表現には詩人の理想主義的側面が明確に読み取れる。しかもその理想主義は、ジプシーと生き物についての詩人の日常的直接体験に根ざした親密さと熟知によって裏打ちされたものである。この連においても、ジプシーと森の生き物との間には連帯感があり、詩人による両者の同一化が感じられる。

ジプシーと生き物との連帯感を考える上で、‘Langley Bush’ (1819-20 年作) という重要な詩を読むことは有益であると思われる。Langley Bush は羊飼いや家畜世話人・ジプシーが神聖なものとして昔から崇敬してきたサンザシの木である。村の農夫が語るところによれば、この木は、若木であった往時にはこの木の下で裁判が行われていたという名誉をもっている。詩人は幹が虚になったこの老木に非常に興味を抱き、何度もその木を見に行った。

. . . even the rude clan
Of lawless gipseys drove from stage to stage
Pilfering the hedges of the husband man
Leave thee (Langley bush) as sacred in thy withering age
Both swains & gipseys seem to love thy name
Thy spots a favourite wi the smutty crew
& soon thou must soon depend on gipsey fame
Thy mulldering trunk is nearly rotten thro
My last doubts murmuring on the zepthers swell
My last looks linger on thy boughs wi pain
To thy declining age I bid farewell
Like old companions neer to meet again²⁵⁾

農場に侵入し、生垣から生きていくのに必要な物を盗んでは、一時の滞在の場所を次から次へと追い立てられる無法者のジプシーたち。彼らでさえこの老衰していく白サンザシを神聖なものとして見なす。農夫もジプシーも Langley Bush という名前が大好きであるように詩人には思われた。この木が立っているところは「あさ黒いジプシー仲間」にとってお気に入りの場所である。‘& soon thou must depend on gipsey fame’ という表現は次のようなことを意味している。すなわちジプシーがよく好んでこの場所にテントを張ることは有名であるが、枯れ木となって間もなく消滅するこの木のことについては、ジプシーとの結びつきでしか思い出されなくなるであろう。詩人自身「わたしの最後の眼差しは悲しくておまえの枝からなかなか離れられない」という表現やサ

ンザシを「昔からの仲間」に喩えていることは、命ある自然の物を人間と同等の位置にまで引き上げているようである。またジプシーたちがこの木を神聖なものであると見なしていることは、自然の生き物と人間の結びつきの深さを感じさせる。クレアと自然の生き物との連帯感に関しては、‘Langley Bush’に先立って書かれたと考えられている無題の詩（1818-20年作）²⁶⁾において、大嵐の際雷の直撃によって倒されたこのサンザシの木を見て、「そしてわたしはその（Langley bushの）悲しい終末を目の当たりにして／その木の運命による損失をまるで友を失ったかのように感じた」（& I thus to witness its sorrowful end / Feel a loss for its fate as I do for a friend）という二行でこの詩を閉じているが、樹木で象徴される自然の生き物の尊厳にたいする敬意と愛情を人間の尊厳にたいするのと同じレベルで表明していることは、他のロマン派詩人たちが自我の主張を重視し、生き物を自我の主張のための手段としてのみ用い、自然の生き物の存在をそれ自体として考察することを軽視していた点を顧慮すれば、特筆に値する。しかしながら、樹木への詩人自身のこうした情緒的な反応とは裏腹に、この無題の詩においても、ジプシーは「とうとうジプシーたちはこの倒れたサンザシから薪を採り／その薪をひっぱり持ち去った」（Till the gipseys sought firing & hauld it away）というような現実的な行為が描写される。ジプシーの生きるための行動を描く詩人はけっして理想主義的ではなく、現実主義的である。詩人が経験したジプシーとLangley bushの関係については、‘Langley Bush’という詩が書かれてから4年後の1824年9月29日の‘The Journal’に、「この世で永続するものは何もない 昨年ラングレー・ブッシュが破壊された それはよく知られたものとして一世紀以上も立っていた一本のサンザシの老木であった ジプシー・羊飼いや牧夫たちは皆その木の昔の出来事についての話を知っていた だからその木の思い出がすぐに忘れ去られることはないであろう」（nothing is lasting in this world last year Langley bush was destroyed an old white thorn that had stood for more than* a century full of fame the Gipseys Shepherds & Herd men all had their tales of its history & it will be long ere its memory is forgotten *than）²⁷⁾という記述がある。この一節でクレアは、このサンザシの存在が羊飼いや牧夫と同様ジプシーの生活と感情の重要な部分を成しており、それらに如何に影響を及ぼしていたかを、言い換えればこの木が‘old companions’の一人であり、ジプシーがこの木にたいし‘friendship’²⁸⁾を抱いていたことを強調している。ジプシーのこのような生き物にたいする精神的態度は詩人自身のものでもある。

(3)

ジプシーと生き物たちが共に生息する「森」(woods)と「共有地」(the common)について考察しておきたい。なぜならば、それらについてのクレアが彼の他の詩においても重要であるからである。まず「森」に‘wild’という形容詞が付いていることに注目すべきである。この森は、権力者によって征服または支配されたことがなく、太古から存在すると詩人によって仮想された自然のままの状態を保っている。したがって、この森は誰にも所有されなかったし、今も所有されていない。このような森に人間と生き物は自由かつ平等に生息しているのである。権力者たちはこの‘wild woods’の本質を無秩序・無法・無政府状態であると考え、その中に生きる者すべてを「危険な社会の除け者」(dangerous outlaws)と見なしていた。こういう森の中を放浪するジプシーの生活様式について、J. GoodridgeとK. Thorntonは次のように指摘している。すなわち、ジプシーの生活様式が「イングランドの田舎の抑圧的な秩序正しさ」(the repressive orderliness of the English countryside)²⁹⁾に反していることをクレアは表現していると。また、クレアの描く森

について J. Lucas は次のような非常に鋭い考察をしている。

‘Clare’s woods provide a kind of sweet, equal republic, they are wild woods, whereas from the point of view of authority ‘the most agreeable woodland was tidily planted or securely partitioned in great estates. Here trees confirmed power of property.’ By the same token, of course, authority sees in wild woods a condition of lawlessness. Such woods harbour outlaws. . . . It follows that Radstock was quite right to recognize Clare’s ‘radical slang’, for the account of woods as ideally non-subservient implies a vision of society as essentially republican, egalitarian; and the sadness of Clare’s lines comes from his recognition of the defeat of this vision’³⁰⁾

こういう視点から見ると、クレアのジプシーの描写は、‘free’ や ‘liberty’ という語に避けがたく付随する理想主義的な傾向を特徴としていることがわかる。1連の冒頭の ‘The gipseys life is a merry life’ とは、まさに人間としての威厳を否定され続けてきたジプシーについての詩人の理想を表現したものにほかならない。ジプシーの生活についての理想化は9連では次のようである。

The elements are grown our friends
& leaves our huts alone
The thunder bolt that rocks & rends
The cotters house of stone
Flies harmless by our blanket roofs
Were* the winds may burst & blow
For our camps tho thin are tempest proof
& buffet rain & snow *where

この連においても、ジプシーの生活についての詩人の理想的な感受とその描写が顕著である。自然の厳しい条件のもとで逞しく生きるジプシーのしたたかさが感じられる。激しい風雨も彼らのテントを直撃したり、破壊したりはしない。それは「自然」が「友だち」であるからだ。ジプシーの毛布でできた屋根は、定住者の石造りの家を揺るがし壊す落雷をもともしない。彼らのテントは薄くても破天荒に強いからである。「暴風雨はわれわれの友だちである」(The elements are grown our friends) とは、ジプシーが「自然」と親密かつ調和した関係を維持しつつ生活していること、そして自然界の生き物の生態に精通して生きていることを示唆している。ジプシーがもっている「自然」との親密さと「自然」についての熟知に関しては、‘Gipsies’ (1924年作) というソネットに次のような一節がある。

They (the gipsies) know the woods and every fox’s den
And get their living far away from men;
The shooters ask them where to find the game,
The rabbits know them and are almost tame.³¹⁾

ジプシーたちは森とそこに生息するキツネの巣穴の在処を知っているので、狩猟者さえ彼らに獲物の居場所を尋ねる。「ウサギたちは彼ら(ジプシーたち)を知っており、ほとんど馴れている」

(The rabbits know them and are almost tame) という一行は、人間と「自然」の親密な関係を表す単に比喩的な表現に止まらず、ジプシーと生き物との具体的な関係を表しているリアリズムと理想主義が融合した詩人の想像力の創造によってのみ可能である。³²⁾

暴風雨のとき農業労働者の住む家を震わせ、破壊する雷はジプシーの毛布で作られたテントの屋根には何の被害も与えずに過ぎ去るといふ。それは、薄い布であるけれども、テントが暴風雨に強く、雨や雪を「打ち返す」あるいはそれらと「戦う」からであるといふ。そしてこのテントは損害を受けることなく安全な状態にある。この連全体がジプシーの放浪生活の安全な状態を強調しているようである。‘(The elements) . . . & leaves our huts alone’ とは、ジプシーの無事と安全を願望する詩人の声である。

May the lot weve met our lives befall
 & nothing worse attend
 So heres success to gipseys all
 & every gipseys friend
 Go were* we will may kindred fate
 Our friendly partners be
 Protect us from the magistrate
 & keep our dwellings free *where

これまでジプシーたちが経験してきた運命が彼らのものであり続け、より過酷な出来事が彼らの身にふりかからないようにと詩人は願望する。ジプシーたちの現在の安全な境遇が続き、彼らが ‘a merry life’ を維持できるようにと祈っている。「だからすべてのジプシーとその友だちみんなの繁栄を祈って乾杯」とは詩人自身から発声された祈願である。ジプシーが今後放浪するあらゆるところで、これまでの「自由で」(free)、「喜び」(joys)に満ちた境遇をもたらした運命と違わぬ運命に恵まれるようにと祈る。治安判事の虐待からジプシーたちを保護し、彼らの住む場所を圧迫や脅迫がなく、自由に、無料で利用できる状態に保ってほしいと、運命の女神にたいして願う。‘Protect us from the magistrate / & keep our dwellings free’ は2連における最後の2行、‘Bad luck to tyrant majistrates / & the gipseys dwelling free’ とほぼ同じ内容のことを繰り返している。このようなリフレインは、home・dwelling・woods・common・free・liberty・wildのようなキーワードについても見られ、この詩のバラッド的特徴となっている。このことは、クレアが民衆のバラッドを尊重し、その形式と詩風を自分の詩の本領であると考えていたことがわかる。

「治安判事」についてはすでに触れたが、クレアはその存在のことを、「無知で冷酷非情な治安判事」(an ignorant iron hearted Justice of the Peace)³³⁾と呼んでいる。この治安判事は英国国教会の牧師でもある。先に引用した有罪判決文を言い渡した治安判事のことを詩人は「そしてこの迫害する非情な人間は英国国教会の牧師であった」(and this persecuting unfeeling man was a clergyman)³⁴⁾といつてその暴虐を非難している。そうすると、6連の‘No parsons fetters link us in’は「どんな国教会牧師の枷もわれわれ(ジプシー)を宗教上の教義やモラルのうちに結び留めることはできない」というようにも解釈できるであろう。また、治安判事のイメージには牧師の生活の乱れ、横暴ぶり、贅沢が暗示されていないだろうか。最終連に移ろう。

& we will sing & dance around

With a heart that never fails
 Tho magistrates like hungry hounds
 Still threaten us with jails
 & while the ass that bears our camp
 Can find a common free
 Around old Englands heaths we'll tramp
 In gipsey liberty

治安判事はジプシーを犯罪人扱いする傾向があった。そして彼は窃盗や詐欺などの犯罪があると、よくジプシーにその罪をきせ、投獄した。「投獄するぞと言っていつもわれわれを脅迫する」(still threaten us with jails)とはそういうことである。それにもかかわらず、ジプシーはけっして衰えることのない情熱をもって歌い踊るのである。「われわれのテントを運ぶロバが／自由な共有地を見出すことができる限りは／ジプシーの自由をもって／われわれは昔からある荒地を放浪する」では、共有地や荒地が「囲い込み」によって分割され、私有地に変えられていったことが言及されている。事実、1750年から1815年にかけて、詩人の住んでいたノーサンプトンシャーの農業用土地の三分の二が解放耕地や荒地から囲い込まれた耕地に転換された。³⁵⁾ このため、ジプシーがよく野営し、住んでいたラングレー・ブッシュも根絶され、変貌した。この場所を失ったジプシーは別の「自由な」土地を探さねばならなかった。ジプシーの自由な生活は共有地や荒地に依存していたからである。共有地や荒地が‘free’な状態であることの意味は、それらの土地がジプシーなどの放浪者たちや貧しい農業労働者に彼らのわずかな家畜のための牧草・薪・木の実・しょう果・キノコを無料で供与していたという状況である。また同時に誰もがこれらの土地に「自由に」出入りでき、そこに存在する生活資源を利用できる状況でもある。これらの土地は彼らにとってまさしく‘home’であった。こういう状況は、とくに彼らにとって「慣習的な権利」(customary rights)³⁶⁾であった。これらの土地が貴族や新興中産階級の支配者層によって囲い込まれ、彼らの私有地になってしまえば、ジプシーたちは自由にこれらの土地に立ち入ることはできなくなった。³⁷⁾ したがって「囲い込み」という形で進められた農業改革によって共有地や荒地が私有化されて消滅したことは、ジプシーや貧しい農業労働者の生活権を奪うことを意味した。生存競争のプレッシャーから身を護る財産や特殊技能をもっていない、地方に住む貧民・放浪者・貧しい労働者・小屋住み農・兵士・船乗りなどが1830年にはイングランドの人口の三分の一を超えていたといわれる。³⁸⁾

ジプシーは盗みを働くことで有名であったが、こうした私有地に許可なく侵入し、家畜や品物を盗めばオーストラリアに流刑されるか、もっとひどい場合は絞首刑に処せられた。私有地への侵入者に監視の目を光らせ、「飢えた猟犬のように」ジプシーを追っ払い、この土地の所有者である支配者層を擁護していたのが治安判事であった。‘magistrates like hungry hounds / Still threaten us with jails’とはこういうことを指しているのである。ジプシー・農場主・治安判事の關係については *The Shepherd's Calendar* の‘October’にも興味深い箇所がある。

& gipseys camps in some snug shelterd nook
 Were* old lane hedges like the pasture brook
 Run crooking as they will by wood & dell
 In such lone spots these wild wood roamers dwell

On commons were* no farmers claims appear
 Nor tyrant justice rides to interfere³⁹⁾ *where (my emphasis)

「農場主による土地の所有権の主張もなく／僭主である治安判事が馬でやって来て邪魔をすることのない」場所である共有地がジプシーの居住地である。詩人が実際敵視していた階層は商人と農業家である。農業家たちはナポレオン戦争後数年間、農業労働者たちの賃金を下げたし、彼らの賃金を下げたままにしておくために季節労働者やパートタイムの労働者を雇った。救貧税の地方管理者であった農業家たちは自分たちの有利になるようにこの税を誤魔化していた。⁴⁰⁾ クレアの社会についての保守的価値観は、「困い込み」・小農業家が大借地人にとって代わられること・農業家たちの上流階級化を推進した進歩的近代化経済の趨勢、といったものにたいする彼の敵意に立脚していた。⁴¹⁾ 治安判事から嫌疑をとくに受けやすい人々がジプシーであったことは既述したが、その理由は、「困い込み」によって共有地や荒地から獲得された私有地に‘No trespassing’の標識が如何に多く立てられようとも、彼らがテントを張る場所を変えようとしない傾向があったからである。私有地でテントを張ることは「侵入」行為であり、重罪であった。支配者層がもつ土地の所有権を護るために、治安判事はその権力を振るってジプシーたちの穏やかな生活を妨げ、彼らを虐待する。それゆえ、治安判事の存在はジプシーと詩人の眼には、私有地の所有を増大していく支配者層の手先と映ったのである。

「侵入」に関しては、クレアの初期の詩である‘Narrative Verses Written After an Excursion From Helpston to Burghley Park’における、私有地に侵入したときの詩人の経験が想起される。詩人は日暮れ前に目的地に到着しようと近道をする。そのため、詩人は「古びた、でこぼこの塀」を乗り越えて貴族の私有地に侵入する。

No spire I caught nor woody swell
 My Eye confind to lower bounds
 Yet not to mark the flowrets bell
 But watch the owners of the grounds
 Their presence was my only fear
 No boughs to shield me if they came
 And soon amid my rash career
 I deem'd such trespassing to blame (113-120)⁴²⁾

詩人の眼は教会の尖塔も、森の広がりも見ないで、その視線は低い地面から離れることはない。それは小さな釣鐘状の花を注意して見るためではなく、この土地の所有者がいるのではないかと見張るためである。詩人が唯一怖かったのは所有者がその場に居合わせることである。所有者が現れたとき、詩人を覆い隠してくれる枝は一つもない。そして急いで駆け逃げながら、このような侵入が犯罪であると思ったと、回想している。クレアは私有地に侵入することが重罪であることを自己防衛のため受け入れた詩人であったが、そもそも「自然」が所有する土地を人間が所有する権利を基本的には認めていなかった。この点では、詩人クレアは自由に放浪するジプシーと思想的には近い立場にあったといえる。詩人がジプシーにたいし如何に親近感や友情を感じていたとしても、詩人の心に生じたこのような感情は詩人としての地位と名声を危うくするものであった。「クレア自身の著作が証明していることは、ジプシーや他の侵入者たちがクレアが抱擁

するには危険な同盟者であろうということである」(The evidence of Clare's own writings is that Gypsies and other trespassers would be dangerous allies for him to embrace)⁴³⁾ と Goodridge と Thornton は述べているが、この指摘は極めて重要である。

このように支配者層によって人間の権利を奪われていたジプシーと、詩人自身が属する下層労働者階級との連帯感を最もよく表現している詩のひとつが‘The Gipsy Camp’である。この後期のソネットは本稿の初めの部分で既に触れたが、ここでもう少し詳しく見ておきたい。

THE snow falls deep; the Forest lies alone:
 The boy goes hasty for his load of brakes,
 Then thinks upon the fire and hurries back;
 The Gipsy knocks his hands and tucks them up,
 And seeks his squalid camp, half hid in snow,
 Beneath the oak, which breaks away the wind,
 And bushes close, with snow like hovel warm:
 There stinking mutton roasts upon the coals,
 And the half-roasted dog squats close and rubs,
 Then feels the heat too strong and goes aloof;
 He watches well, but none a bit can spare,
 And vainly waits the morsel thrown away:
 'Tis thus they live — a picture to the place;
 A quiet, pilfering, unprotected race.⁴⁴⁾

この詩は、クレアが1837年から1841年にかけて入院していた High Beech の精神病院時代に書いたものである。High Beech にある Epping Forest はジプシーの野営の場所として有名であった。外出の自由を与えられていた詩人はよく Epping Forest に散歩に出かけ、そこでジプシーがテントを張って生活しているのを日常的に観察していた。この詩はそういうジプシーの生活についての度重なる体験に裏打ちされて出来あがっている。この詩の前半では、詩人が寒い冬の日の夕暮れ時によく見慣れていたジプシーの行動が描写されている。ジプシーの若者はたたいたり、こすったりして手を暖めながら、降りしきる雪の中を薪にする枯れ枝を取りに行く。それから、樫の木の下のや、すぐそばにある低木の茂みの下に張られたむさくるしいテントへと戻ってくる。その時、頭の中は焚き火で暖をとることでいっぱいである。後半では、詩人の眼は若者の一つ一つの細やかな動作からテントの周囲の状況へ移り、さらにテントの中での食事の情景へと移っている。食事の情景において、詩人の眼はジプシーの動作ではなく、犬の動作に焦点を合わせている。テントの中では真っ赤な燃えさしのうえで焼かれているマトンのいやな臭いがしている。そのお裾分けにあずかろうと必死になった飼い犬は燃えさしに近づきすぎて、その体は焼けるほど熱くなっている。それほど飼い犬も飢えている。ジプシーが飼い犬に一口の肉も与えないのは、それほど彼らが貧しいからである。詩人は「断固たる率直さ」でもって、冬の厳しい寒さの中で生きているジプシーの若者と犬のイメージを作り上げている。これらのイメージは彼らを取り巻く苛酷な条件を暗示しているように思われる。それらのイメージから判断すると、詩人の心は描写の対象の中にけっして貫入していないことがわかる。詩人と対象の間には何ら接触はない。それゆえ、われわれはこの詩をリアリズムの詩と呼ぶことができよう。あるいは Raymond Williams が言う

ところの、作者独特の「静かな客観性」(quiet objectivity)⁴⁵⁾をもつ詩と呼ぶこともできよう。

しかしながら、住み慣れた土地と家族から離れたクレアはこの時期自己のアイデンティティを失い、自分をますます放浪者であると自覚するようになっていたが、そうした心理状態もこの詩に暗示されている。ジプシーの生活を観察していたクレアは、彼らの生活を「その場所にぴったり調和した、美しいもの」(a picture to the place) というように一方では審美的な眼で観察していたのである。ジプシーとその生活が「自然」と調和する美であるがゆえに、クレアは彼らを愛していたのである。ジプシーにたいするそうした態度は 'Autobiographical Fragments' における 'I thought the gipseys camp by the green wood side a picturesque and an adorning object to nature and I lovd the gipseys for the beautys which they added to the landscape'⁴⁶⁾ という記述の中によく表われている。とくに、*The Later Poems of John Clare 1837-1864* (Oxford U.P., 1984) に収められたジプシー女性についてのいくつかの詩において、クレアはジプシー女性を理想化し、その美しさを賛美している。クレアは失った喜びの時間と場所、言い換えれば「エデンの園」の回復願望を、美化されたジプシー女性と楽園の一体化という形で試みていると考えられる。詩人がジプシーの生活と女性を美化し、理想的に描出するとき、すなわち彼らの「喜び」、自由、音楽、ダンス、女性の肉体美、「自然」との調和した生活などを描出するとき、E. Robinson が指摘するように、詩人は田舎の既成の社会制度に反抗して政治的な叙述をしていることになる。それも詩人が上位の階級の眼でジプシーを見下ろすのではなく、同じ下層階級の眼で共感をもって、その生活を内側から見ているのである。とくに 'free' や 'liberty' という語で暗示されている現実の状況は詩人にとって深刻な問題であった。これらのキーワードの使用によって、ジプシーについての理想的な記述におけるアイロニカルな意味が強調されている。すなわちジプシーは、貧しい労働者と同様、現実には「自由」を奪われつつあったのである。彼らから「自由」を剥奪することは、詩人の眼には、とりもなおさず彼らもっていた「所有権」の剥奪であった。詩人が訴えなかったことは、共有地や荒地の「囲い込み」によって近代資本主義農業家が獲得した「所有権」が、ジプシーの生きるための「人間の権利」を如何に阻害していたか、ということであろう。⁴⁷⁾

'The Gipseys Song' をクレアの他のジプシーについての詩と比較・対照しながら、このように読んでくると、次のような結論が導き出されるであろう。すなわち、詩人はジプシーたちが人間としての尊厳を無視されていた事実や、生きるための基本的な諸権利を奪われつつあった事実を適確に認識したうえで、彼らの人間性と生活を賛美することを通じて、彼らへの共感や連帯感を表出していることである。この詩は支配者層によって喪失を余儀なくされたジプシーの「生きる権利」と「自由」を擁護する意図でもって書かれているが、この詩はまた同時に、詩人自身が属する下層労働者階級の生活の「権利」と「自由」を擁護しているということである。虐げられた人々を見る詩人の眼は、自らが置かれた境遇の中で経験したことと相俟って、現実社会の状況把握をけって疎かにすることはない。むしろその現実を直視し、現実認識を重視することこそがこの詩人の眼の第一義的働きである。英国ロマン派の詩人達の通弊であるとも言える、知覚の対象の軽視、ひいては現実軽視の態度は、クレアの場合、およそ後期の詩以外には認めがたい。因みにワーズワスの 'Gipsies' (1807年作) を見ておくことは両詩人の眼の相違を理解する点で無駄ではない。「依然として、かれら(ジプシーたち)はここにいるのか? 一人間たちの同じ途切れぬ群れが、まったく同じ場所に!」(Yet are they here? — the same unbroken knot / Of human Beings, in the self-same spots!) で始まり、「静かな夜の天空さえ動いているのだ、/星たちさえ仕事をもっているのだ—だがこれらの人々(ジプシーたち)は何もすることがない」(The silent

Heavens have goings on; / The stars have tasks — but these have none.)⁴⁸⁾ で閉じるワーズワスのこの詩は自我中心主義に満ちている。この詩が ‘a search after Truth’ ではなく、 ‘a kind of sketchy intellectual Landscape’ であり、「もしワーズワスがその詩を書く時にもう少し深く考えていたなら、彼はその詩をまったく書かなかったであろうと私には思われる」 (it seems to me that if Wordsworth had thought a little deeper at that Moment he would not have written the Poem at all)⁴⁹⁾ とキーツがこの詩の欠点を指摘しているように、ワーズワスは詩人としての「仕事」に常に従事している自分を意識するあまり、「仕事」をもっていないという印象を彼に与えたジプシーの「怠惰」を非難している。このようにこの詩において、ワーズワスはジプシーたちの現実の生活を客観的に観察する眼と彼らの実態を把握しようとする意識をもっていないように思われる。ワーズワスのこの詩と比較するとき、少なくともクレアの ‘The Gipseys Song’ という詩は、ジプシーたちを賛美することによって彼らの人間としての尊厳とその生活における「自由」と「権利」の回復を実現するという願望がそのモチーフであるため、理想主義的な詩趣となっはいるけれども、対象を客観的に捉えようとする鋭い観察眼による現実認識に基づくものである。そしてこの詩の最大の特徴は、社会における追放者であるジプシーへの作者クレアの共感と擁護の感情の表出であり、またジプシーと同時に、虐げられた弱者である下層労働者階級の人々との連帯感の表出ではないのか。C. Lamont が ‘Clare’s gipsy poems are descriptive, reflective, nostalgic, lyrical.’⁵⁰⁾ というように、たしかにジプシーに関するクレアの詩はいくつかの種類形式と性質をもっている。しかしながら、クレアの gipsy poems における理想主義の最大の特徴は以下のようなことではないのか。すなわち、個人における想像力とそれが創出した世界が喪失していくことよりも、英国国民の大多数を構成する一般大衆、とくに虐げられた貧しい人々における生きるための人間の諸権利と「自由」が喪失していく社会現実のほうをクレアが重視し、それらの回復を希求したことではないのか。最後に J. Lucas の次のような洞察に満ちた評言を掲げたい。

Clare’s trope voices a greater sense of loss than Wordsworth’s failed visionary gleam, for where that had been about the failure of an individual imagination, this speaks of a deep, representative and most grievous loss of rights, freedoms, and even selfhood.⁵¹⁾

注

- 1) Merryn and Raymond Williams eds., *John Clare: Selected Poetry and Prose* (Methuen, 1986), p.213.
- 2) Eric Robinson, David Powell and Margaret Grainger eds., *The Early Poems of John Clare 1804-1822*, Volume II (Oxford U. P., 1989), p. 171.
- 3) Merryn and Raymond Williams, p. 203.
- 4) Eric Robinson, David Powell and P. M. S. Dawson eds., *John Clare: Poems of the Middle Period 1822-1837*, Volume I (Oxford U. P., 1996), p. 139.
- 5) J. McKusick, ‘Beyond Visionary Company’: John Clare’s resistance to Romanticism’ in Hugh Haughton, Adam Phillips and Geoffrey Summerfield eds. *John Clare in Context* (Cambridge U. P., 1994), p. 233.
- 6) Ibid., p. 233.
- 7) Ibid., p. 234.
- 8) Mark Storey ed., *The Letters of John Clare* (Oxford U. P., 1985), p. 350.
- 9) ‘The Gipseys Song’ のテキストは *John Clare: Poems of the Middle Period 1822-1837*, Volume IV を使用した。
- 10) ジュール・ブロック, 『ジプシー』 (木内信敬訳, 白水社, 1993), pp. 3-4.

- 11) E. Robinson ed., *John Clare's Autobiographical Writings* (Oxford U. P., 1983), p. 65.
- 12) *Ibid.*, p. 68.
- 13) See Clair Lamont, 'John Clare and The Gipsies' in *The John Clare Society Journal*, Number 13 (1994), p. 29.
- 14) P. M. S. Dawson, Eric Robinson and David Powell eds., *John Clare: A Champion for the Poor: Political Verse and Prose* (Mid Northumberland Arts Group / Carcanet Press, 2000) の 'Introduction' には次のような箇所がある。
Of course there were some people who tended to be particularly open to suspicion from the magistrates. The gypsies, in particular, tended to keep to their customary migratory paths for travel and to their customary sites for setting up their tents, no matter how many new 'No Trespassing' signs were posted. (p. xxiv)
- 15) 'The Village Minstrel' in *The Early Poems of John Clare 1804-1822*, Volume II, p. 171.
- 16) ジュール・ブロック, p. 81.
- 17) *John Clare's Autobiographical Writings*, p. 69.
- 18) *Ibid.*, p. 69.
- 19) 'Introduction' in *John Clare: A Champion for the Poor*, p. xxiv.
- 20) ジプシーが動物の「死体」を食べることについては *John Clare's Autobiographical Writings* の中に次のような記述がある。
They (the gypsies) eat the flesh of Badgers and hedge hogs which are far from bad food for I have eaten of it in my evening merry makings with them they never eat dead meat but in times of scarcity which they cut into thin slices and throw on a brisk fire till it is scorched black when it loses its putrid smell and does very well for a make shift providence when they can afford it they wash the meat in vinegar which takes the smell out of it and makes it eat as well as fresh meat (p. 70)
- 21) John Goodridge and Kelsey Thornton, 'John Clare: the trespasser' in *John Clare in Context*, p. 108.
- 22) John Lucas, *John Clare: Writers and Their Works* (Northcote House, 1994), p. 32.
- 23) ジュール・ブロック, p. 7.
- 24) *John Clare's Autobiographical Writings*, p. 70.
- 25) *The Early Poems of John Clare 1804-1822*, Volume II, p. 250.
- 26) この無題の詩にはジプシーと Langley bush の関係を示す次のような部分がある。
I lookd on yon knowll* at our favourite bush
Were** gipseys campd round it in freedom did dwell
.
.
Tho the gipseys haunt still the lovd spot as before
& the swain calls it still by the name it once bore
Langley bush with its scard trunk & grey mossy bough
Is fled & the scene is left desolate now
A storm that made shepherds in dread for an hour
& boild oer the hills its thunder & shower
Struck it down to to earth were** it withering lay
Till the gipseys sought firing & hauld it away *knoll **where (*The Early Poems of John Clare 1804-1822*, Volume I, p. 544)
- 27) Margaret Grainger ed., *The Natural History Prose Writings of John Clare* (Oxford U. P., 1983), p. 183.
- 28) クレアは 'friendship' を樹木にたいしてのみならず, 「自然にとても近い」 (so akin to nature) 事物にたいしても抱いていた。引用 27) の直前には, 取り除かれた「古い木の踏み越し台」について, 「古い踏み越し台が存在しなくなったのを見て心が痛んだ, というのは私の愛情はそういった (生き物でない) 事物にたいしてさえ友情を求めるからです」 (it hurt me to see it (an old woodstole) was gone for my affections claims a friendship with such things, *The Natural History Prose Writings of John Clare*, p. 183)
- 29) J. Goodridge and K. Thornton, p. 113.
- 30) John Lucas, *Englnd and Englishness: Ideas of Nationhood in English Poetry 1688-1900* (Hogarth Press, 1990), p. 142.
- 31) J. W. Tibble ed., *The Poems of John Clare*, Volume II (J. M. Dent & Sons, 1935), p. 349.
- 32) 'The Holiday Walk' (1827-30 年作, *John Clare: Poems of the Middle Period 1822-1837*, Volume III) には次のような一節がある。

While round the warped camp neath yon bushes & trees
 The gipseys lie basking themselves at their ease
 & the gipsy boys shaking their rags to the sun
 Are headed over ears in their frolic & fun
 Chasing barefoot along with their dogs by their side
 Barking loud as the rabbits bob by them to hide (p. 408)

- 33) *John Clare's Autobiographical Writings*, p. 69.
 34) *Ibid.*, p. 69.
 35) See 'Introduction' in *John Clare: A Champion for the Poor*, p. xxxv.
 36) *Ibid.*, p. xxi.
 37) 「囲い込み」とジプシーの居住地の関係について、クレアは次のように記述している。
 There is not so many of them (the gipsies) with us as there used to be the inclosure has left nothing but narrow lanes were* they are ill provided with a lodging Langley Bush is the only place were* they frequent commonly (*John Clare's Autobiographical Writings*, p. 72) *where
 38) 'Introduction' in *John Clare: A Champion for the Poor*, p. xxx.
 39) *John Clare: The Poems of the Middle Period 1822-1837*, Volume I, p. 139.
 40) See 'Introduction' in *John Clare: A Champion for the Poor*, p. xxxi.
 41) *Ibid.*, p. xxxiii.
 42) *The Early Poems of John Clare*, Volume II, p. 4.
 43) J. Goodridge and K. Thornton, p. 107.
 44) Eric Robinson, David Powell and Margaret Grainger eds., *The Later Poems of John Clare 1837-1864*, Volume I (Oxford U. P., 1984), p. 29.
 45) Merryn and Raymond Williams, p. 203.
 46) *John Clare's Autobiographical Writings*, p. 31.
 47) 「所有権」, 「人間の権利」および「治安判事」について E. Robinson は次のように説明している。
 And all property-rights are equally an encumbrance on the Rights of Man. Any of the offences against the law of property may bring the offender before the magistrate who is a symbol of tyranny. ('Introduction' in *John Clare: A Champion for the Poor*, p. xxvi)
 48) Stephen Gill ed., *The Oxford Authors: William Wordsworth* (Oxford U. P., 1984), p. 332.
 49) *Ibid.*, p. 719.
 50) C. Lamont, p. 29.
 51) John Lucas, *England and Englishness: Ideas of Nationhood in English Poetry 1688-1900*, p. 150.